

文学教育と社会の連結——「母子像」を教材として
 LINKAGE BETWEEN LITERARY EDUCATION AND SOCIETY:
 A TOPICAL EXCURSUS OF “BOSHIZO”

林 淑丹, 台湾・文藻外語大学
 Shudan Lin, Wenzao Ursuline University of Languages, Taiwan

1. はじめに

本稿でいう文学教育とは、海外で日本文学を教授することである。本稿は、日本以外の国でいかにして日本文学を教えるか、という視座から文学教育を検討するものである。海外での日本語教育を考えると、一定の水準の語学レベルを達成した学習者に、日本の文学作品を読ませることの重要性は見逃せないであろう。なかでも、戦争の記憶を題材にした作品を、海外の学生にいかに読ませるか、いかにしてより深い読みをさせるのかという問題は、文学教育の大きな課題である。

海外で日本語を学ぶ学生が戦争文学を読むとき、いかなる歴史感覚を形成してゆくのか、また、当時の社会背景をいかに理解してゆくのか。それは、外国の学生が日本の戦争文学をいかに読んでいるのかということに関連しよう。本稿では、久生十蘭の「母子像」を例にして、学生のさまざまな読みとその社会理解の有り様を分析することにより、戦争作品の読解を通じた、作品に潜む深い社会文化の理解を、いかにして学生に行わせるかを検討するつもりである。

2. 文藻外語大学における日本文学教育

台湾では、宗教関連、軍・警察、放送通信制大学などを除いた、いわゆる一般大学（四年間制度、英文表記が *university* と表記されている大学）は、二〇一四年時点で全国に一五九校ある。そのうち、日本語学科が開設されている学校は、現時点で四十校近くある。そして、ほとんどの日本語学科に「日本文学作品読解」、「日本名著読解」、「日本近現代文学鑑賞」、「日本文学史」などの科目が設けられている。台湾における日本文学教育の始まりは、日本語教育が実施された時点からだと言える。要するに、四年制の大学教育では、日本語教育に日本文学教育が内包されている、ということである。ここでいう日本文学教育には、日本文学そのものの研究ではなく、日本語を手段とした一般教養の養成、または日本に対するより深い理解の涵養など、多くの目的があった。現在、台湾の一般大学における日本語学科の多くは、一般教養の養成を目的として、文学教育に関する科目を設置している。

近年、台湾の日本語学科では、「日本を知る」人材の育成を、学科の教育目標として掲げることが多い。日本の何を、どこまで知れば「日本を知る」ことになるのかという問題はさておき、「日本を知る」ための科目を設置する際に、日本文学のことを視野に入れず、文学関連の科目が含まれていない学校も見られる。台湾における日本語教育の伝統をたどればわかるように、文学教育は日本語学科の成立と深くかかわっていた。「日本を知る」人材の育成という観点からみれば、

一般教養として文学作品の読解力を身に付けさせることの重要性は言うまでもない。外国で日本語を学習するとき、語学学習だけでなく、文学作品を読むことの意味とその重要性は見逃せない。文学教育は、学生の日本語学習の一環であるのみならず、日本語学習者として必要とされる文化的素養でもあるからである。

筆者の勤務校である台湾・文藻外語大学は、台湾における唯一の外国語大学であり、学生数は現在約九千人である。そのうち、日本語学科は学生数およそ千六百人、専任教員は二十三人、非常勤講師は五十人近くという規模である。日本語学科の学生千六百名のうち、八百名は四年制日間部の学生である。四年制日間部では、一学年に四つのクラスがあり、ひとつの学年に合わせて二百名の学生がいる、という計算になる。そのほか、日本語学科に五年制高校部（日本の高等専門学校に相当）、二年制大学部（大学三年生と四年生に相当）および、四年制夜間部もある。

文藻外語大学では、あらゆる学制に日本文学関連の授業が設置されている。五年制高校部の四年次には「日本現代文学読解」（通年4単位）、五年次には「日本名著読解」（通年4単位）という科目が設けられている。四年制日間部の四年次には、「日本文学史」（前期2単位）と「日本文学精読」（後期2単位）という科目が設置されている。また、四年制夜間部の四年次には、「日本現代文学読解」（通年4単位）という授業がある。これらはすべて選択科目であるが、すべての学制に必ず日本の文学作品を読む科目を設けるとするのが、本学科のカリキュラム設計の方針である。

3. 太郎の母親像について

本稿で対象とした学生は、「日本文学精読」を履修した、四年制日間部の四年生と二年制大学部の四年生である。「日本文学精読」は後期（二月末から六月末）の授業であり、前期の「日本文学史」の内容を引き継いだ科目である。選択科目のため、毎年受講生の数が異なるけれど、二〇一七年の「日本文学精読」の受講生は二十名であった。これらの受講生は、日本の文学作品に興味をもっているのでこの科目を履修したのであって、単位が必要なために履修したのではないという。

「日本文学精読」では、久生十蘭の「母子像」を取り上げている。久生十蘭は、推理小説、現代小説、歴史小説など多面的に活躍した作家である。久生は博識で、小説の技法が非常に優れている。「母子像」は一九五五年に発表された作品であり、サイパン島玉砕の生き残りの親子を題材にしている。そのあらすじはつぎのとおりである。

第二次世界大戦中、サイパン島がアメリカ軍に所有される直前に、和泉太郎の母親はアメリカ軍に虐殺されることを恐れ、自らの手で太郎の首を麻紐で締める。その後、太郎は教師たちの人工呼吸で息を吹き返し、日本へ連れて来られる。太郎は、母親が女を売ることを偶然に知り、「美しい」と思い続けてきた彼の母親像は一瞬に崩壊する。現在十六歳になる太郎は、ずっと優等生であった。しかし、普段はおとなしい太郎は、夜になるとセーラー服を着て銀座のバーに花売りとし

て出入りしたり、朝鮮戦争帰りの軍人をポン引きのようにバーに案内したりしていた。物語は、太郎が素行不良で検挙されたため、中学部の担任教諭が警察署から呼び出しを受けたところから始まっている。物語の最後に、死を求め続けた太郎は警官によって銃殺される。

講義中、作品のあらすじや難しい表現を解説しながら、いくつかの問題を提示して、学生に討論させる。議論の方向性を規定したり、拘束したりすることはしない。「母子像」の場合、主につぎのような質問を提示した。太郎の母親像はいかなるものか、太郎の母親をどう思うか、太郎についてどう思うかである。

第一問の「太郎の母親像はいかなるものか」は、学生による作品理解を確認する質問である。二十名のうち、当日五名が欠席したため、十五名の学生が討論に参加した。また放課後、質問に対する回答をオンラインで提出させた。第一問に対して、十五名のうち十二名の学生が、太郎の母親像を把握できていた。残りの三名は質問を誤解してしまい、自分の理解した太郎の母親像を答えた。学生の作品理解を確認したうえで、つぎに第二問に答えさせた。第二問はオープン・クエスチョンで、「太郎の母親についてどう思うか」という第一問に関連したものである。

十五名のうち、九名の学生が母親に深く同情していることがわかった。なかでも尊敬、敬服、母の愛に言及している学生がいた。九名の受講生の関心は、ほとんどつぎのような意見に集約される。たいへん美しい才媛でありながら、戦争のため慰安婦にならなければならなかった彼女に深く同情し、同時に、子どものために強い女として生まれ変わったことに敬服するというものである。全ての受講生が、太郎の母親が慰安婦であることを認識していた。太郎の母親像を深く考えるとき、慰安婦としての彼女の姿を想像して歴史感覚を形成する。学生たちの回答から、戦争下で苦しむ女性像が浮かび上がってきたことがわかる。この点に関して、クラスで活発な討論をしたため、学生たちのところに強い印象を残したのであろう。

残り六名の受講生のうちの一人は、母親のせいで太郎は一生トラウマを抱えていたと語っている。これら六名の学生は、第二次世界大戦の背景からというより、人間性の視点から太郎の母親を考えたと察せられる。その理解は、日本という個別の国家・民族とは関係なく、作品の世界に入りこみ、人間の本性について考えた結果であると言えよう。

こうして、この六名の受講生は、歴史認識の視点からは太郎の母親を理解していないけれど、人間像の有様について思考を行った。このことは、もはや外国人の視点から日本の戦争小説を読むといった異文化理解のための読書ではなく、国の枠組みを超え、ヒューマニティーに着目してその小説を読んだと言えるのではないか。これは、作品の読解を通じて教養を培うという文学教育の根本的な目的をある程度達成できたとも言えよう。

4. 太郎の人物像について

三つ目の設問は、「太郎についてどう思うか」である。ここでは、優等生だった太郎の行動が突然変わったのはなぜか、という質問を含めて受講生に自由に考えさせた。この質問に対して受講生はさまざまな意見を提出した。ここから、それぞれの受講生が異なる観点から太郎の奇妙な行動を理解していることがわかる。

まず、太郎に深く同情する受講生が五名いた。セーラー服を着るという太郎の行動は母親の模倣であり、模倣することによって崩壊した母親のイメージを修復するという意味が含まれている、と語る学生がいた。結末の太郎の死は、彼にとっては真の自由の獲得だと解釈する受講生もいた。筆者は、太郎の死について講義中特に語ってはいないが、この受講生は、太郎に対する理解を彼の死にまで結び付けたのである。

また、太郎は最終的に母親を憎んでいたのではなく、むしろ彼女を愛していたのだと考える受講生が三名いた。一方、サイパンから帰ってきたとき、太郎は自己嫌悪に陥っていたので、自己虐待のために奇行に走ったのだと考える受講生も五名いた。太郎はかなり心が歪んでいるというのが彼らの意見である。その他、太郎の奇行はつまりこの世への復讐だと読み取る受講生と、太郎はつねに母親に殺される恐怖に陥っていたのだと考える受講生が一人ずついた。

このように、十五名の受講生は太郎について深い関心をもち、それぞれの視点から太郎を解釈しているのである。なかでも注目すべきなのは、五名の受講生が太郎像に反映された戦争の実態をよりはっきりと意識していたことである。五名中三人が「戦災孤児」に着目し、残りは「米軍に虐殺」（米軍の俘虜になる）と「慰安婦」について語った。

戦災孤児に注目した学生たちは、戦争災害の実況をほかの学生より意識している。作品の社会的背景を探ることにより、その時代の歴史感覚がより具象化されたと言えよう。一方、「米軍の俘虜」について述べた受講生は、太郎がそのような時代背景に生きていた子どもだ、ということを明確に意識している。「太郎は米軍に捕まったら、死あるのみだ」というように、太郎の時代背景と社会状況を十分把握していると言える。もう一人の受講生は、太郎の人物像を含め、慰安婦の悲劇についてより詳しく語った。この三人の受講生は、クラスのほかの受講生よりも戦争という歴史背景を意識し、戦災の社会問題、戦争の記憶を真剣に考えたことがわかる。

しかも、以上の三つの質問のほかに、作品全体の感想を語ってくれた受講生が一人いた。この受講生は、この作品はとても悲しいものだと述べ、「慰安婦の歴史、戦争がもたらした悲痛が、作者の文章から伝わってきた」と説明している。慰安婦、子殺し、自殺、集団自殺、遺体、民族自決などは重い歴史の課題で、政府はその責任から逃れられないと彼女は強く訴えている。

以上のように、多くの学生が太郎の母親を考えると、戦争を十分に意識していることがわかる。この作品を読んで、慰安婦の悲運の一端を理解し、しかも同情を示している。クラスに女子学生が多かったことが一因かもしれない。しかし、

登場人物の立場になって真剣に思考を巡らせたことは、本科目の学習効果における重要な一項目であったと言えよう。

それから、太郎の人物像について、三分の一の受講生が戦争という時代背景をしっかりと把握し、戦災に着目して考えていた。彼らは、たんに戦争という漠然としたイメージをもっていたわけではない。戦争中、米軍の俘虜に対する扱いや、米軍による虐殺などの史実をより明確に認識していることがわかった。残りの学生たちは、太郎の人物造型、とりわけ親子関係に着目して読み取っていた。

文藻外語大学日本語学科の場合、「母子像」を読むとき、国境を超えて人間性に着目する一方で、大半の受講生が、ある程度戦争の社会的背景が把握できていたことがわかった。こうして、受講生の読みを確認しながら、彼らの理解を深めるため、教師は部分的に解説を入れていった。

5. おわりに

以上のように、久生十蘭「母子像」の読解を通して、第二次世界大戦時における日本の状況を受講生に印象づけた。のみならず、クラスで討論することによって、受講生の思考力の向上により刺激になったと言える。

クラス全員がそれぞれ異なる解釈で、太郎の奇行を理解した。このことから、受講生は当時日本の時代背景と社会背景をある程度把握できていたと言える。授業で「母子像」を読むことを通じて、その時代に対する歴史認識がいっそう明確になったはずである。受講生は、慰安婦や戦災孤児の問題に触れることにより、当時の社会状況と歴史的背景をより深く理解できたであろう。のみならず、文学作品を読むことで、受講生は人間性の深層を考える契機ともなった。履修生はこれにより、教養を深め、国際理解を促進したと言えよう。